HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Relationship between neuroticism and oral health-related quality of life in patients with removable partial dentures [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	石田, 桂大
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第12588号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65357
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Keita_Ishida_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（歯学）　氏 名 石 田 桂 大

審 査 担 当 者　主査 教授 横 山 敦 郎
副査 教授 北 川 善 政
副査 教授 山 口 泰 彦

学 位 論 文 題 名

Relationship between neuroticism and oral health-related quality of life in patients with removable partial dentures

（ 可撤性部分床義歯装着患者における神経症傾向と口腔関連 QOL の関連 ）

審査は，審査担当者全員の出席の下，はじめに申請者より提出論文の概要の説明が行われ，審査担当者が提出論文の内容および関連した学問分野について口頭により試問する形式で行われた.

学位申請者が説明した論文の内容を以下に示す.

補綴治療において，神経症傾向の高い患者ほど口腔関連Quality of life（OHRQoL）が低いことがこれまでに多数報告されており，一般に神経症傾向の高い患者に対して高価なもしくは長期間の歯科治療は避けたほうが賢明であると考えられている．しかし，神経症傾向とOHRQoLの関連について，補綴治療前後での比較は少なく，さらに，可撤性部分床義歯（RPD）に限定した研究や，残存歯などの因子による影響，治療前後での治療効果に関する研究は認められない．本研究では，RPD装着予定患者における神経症傾向と補綴治療前後のOHRQoLとの関連，さらに神経症傾向が治療効果にどのような影響を与えるかを明らかにするために，前向きコホート研究を行った.

被験者の選択基準は，2015年7月から2016年7月までに北海道大学病院歯科診療センター義歯補綴科においてRPDの作製を行う患者とした．調査項目は，新義歯作製前に患者の年齢，性別，Eichner分類，神経症傾向，咬合力，OHRQoLを，義歯装着後3か月経過時に咬合力，OHRQoLを調査し，治療前後のOHRQoLの変化量から治療効果を求めた．神経症傾向とOHRQoL，咬合力の評価にはそれぞれ日本版NEO-five-factor inventory (NEO-FFI)，日本版Oral Health Impact Profile (OHIP-J)， デンタルプレスケールを用いて評価した．統計解析に関しては，神経症傾向と補綴治療前後のOHRQoLとの相関をSpearmanの順位相関係数により算出した．また，被験者を神経症傾向の高さにより3群に分け, 各群内でのOHIP-Jスコアの比較にWilcoxonの符号付順位和検定を用いた．さらに，従属変数を治療効果，独立変数を年齢，性別，Eichner分類，神経症傾向，

咬合力の変化量，治療前のOHIP-Jスコアとし，ロジスティック回帰分析を行い，治療効果に影響を及ぼす因子を検討した.

選択基準を満たし, 除外基準に該当せず, 脱落したものを除いた63名を対象とした. 補綴治療前では, 神経症傾向が高い患者ほどOHRQoLが低く, 補綴治療後においては, 神経症傾向は治療後のOHRQoLとは無関係であった. 対象患者を3群に分けた群内比較では，神経症傾向の高い群及び中間の群においてOHIP-Jスコアの有意な低下が認められ，特に神経症傾向が高い群では有意に大きなOHRQoLの改善がみられた．多変量解析の結果，神経症傾向と治療前のOHIP-Jスコアが治療効果に有意に影響を与える因子として選択され，神経症傾向が高い患者は低い患者と比較して有意に大きな治療効果が得られることが示された.

申請者は，以上の学位論文の結論として，一般的に口腔への満足が得られにくいとされている神経症傾向の高い患者であっても，可撤性部分床義歯による補綴治療により十分な満足を得ることができる可能性を示した.

審査における各委員からの主な質問と回答は以下の通りであった.

１）OHRQoLについて

日本版OHIP(OHIP-J)を用いて評価した.

２）補綴治療後のNEO-FFIを調査しない理由および3群に分類した基準について

先行研究では，短期間ではNEO-FFIの値は変化しないとの報告が多いため，治療後には調査しなかった．3群には，+/- 1SD以内と以上で分類した.

３）OHIP-Jに関する四分位点での区分について

正規分布をしていなかったため，上位四分の一で二値化した.

４）被験者数ならびに除外者について

被験者数は，自主臨床研究審査委員会で示唆された数を満たしていたが，選択基準を満たしていたが同意が得られなかった患者が52名と多かった.

５）NEO-FFIと神経症の関係について

NEO-FFIは，神経症傾向という性格を評価する方法であり，神経症かどうかを診断するものではない.

６）先行研究について

先行研究では，部分床義歯のみを対象としているものはなく，治療効果の検討，さらに多変量解析を行ったことが本研究の特徴である.

以上の様に，主査ならびに副査からの質問に対して，学位申請者は十分に説明し，回答をするとともに，今後の研究に対する展望も示した.

学位申請者は，本研究において，口腔への満足が得られにくいと考えられている神経症傾向の高い患者においても，可撤性部分床義歯による補綴治療により十分な満足を得ることができる可能性を明らかにし，その内容は高く評価された．よって学位申請者は博士（歯学）の学位授与に値するものと判定した.